

人間に生まれること

横川の賢者曰く「先づ三悪道をはなれて 人間に生るること おほきなるよろこびなり」

人様

私は三月十八日の午後、法兄と別れて小さい汽車に身を托して構内をはなれる時、しよんぼり立つて見送つて下さった法兄のことを考えて、寂しい寂しい心で考えこみました。別れることは悲しい。三人村の井上氏のお宅のおはなれの四畳半で、最後のなつかしい悲哀な時間を費している時、法兄は「先生！ 別れたくありません。」とおつしやいました。別れたくない。それが地上の悲しい約束に制限された者の、血の出るような訴えであります。

仲よく暮す夫婦も、兄弟も、親子も、友達も、一度はきつと別れねばならぬ。ああ全ては一度別れねばならぬ。こうした地上に生きる者の悲しい苦悩を思う時、涙なくしては生きられない。まことに仲のよい者も、傷つき合つた者も、味方も、敵も、全ては一度別れて行く。百年して来て見たら龍宮から帰つた浦島のように、誰一人見知つた人はないのだ。こうした気持ちで人々を見なければならぬことは、この上なく悲しいけれど、なつかしいことであります。

生きているのもあまり長いことではない。人々は皆愛しあつて行かねばならぬ。皆同胞なのだ。厳粛に愛しようとする者にとつては、別れても一度はきつと会える、という信念ほど有難いものはありません。皆お光の世界では温い心で一緒に会える。お経文の俱会一処というお言葉が特別になつかしまれます。

1

人様 十六日の晩でしたかね。法兄は初対面の人として、可部町の○先生に導かれて来て下されました。法兄は私が二十一、二才頃、胸に一ぱいであつたような問題について、悩んでいることを言つて下さいました。現在の生活にあきたらないで、何かを求めようとなさる法兄の魂を尊いことに思いました。苦を誰にでも打ち明けて、平気にかたづけられることは悲しいことだとお言ひでした。私も申しました。まことに、人間に苦の与えられることは、宝玉を与えられていると同じことです。苦は真珠であります。豚の前に投げてはなりません。猫の前には何の価値もないことなのです。苦の味わい方一つで人は、自暴自棄の人とも、人らしい香のぬけた人とも、愛に生きる人とも、み仏を知る人ともなるのです。お互にしつくりと与えられた苦を素直に受け入れて、沈黙して深い世界に導かれて行きましょう。人と人とが愛せねば生きて行けない尊い気持ちも、ここから湧いて来るのでしよう。

一度ああした温い空気にふれた法兄は、十七日は朝から来て下さいました。朝からあの四畳半に集つて、尊い仏のお慈悲についてお問いなさる方や、人生上の苦しい問題について御相談下さるお方に、私の貧しい考えを捧げている時、法兄はあの南側のガラス窓の方に坐つて、始終黙つて聞いていて下さいました。そうした人たちの間には温い涙ぐましい空気がただようていました。貪瞋痴の三毒の焰の世界にも、こうした温いみ仏によつて恵まれた空気のあることを知つて下さいました。老人のお口からは無邪気なお言葉が出ます。若い方の目には法悦の涙がただようています。私は

法兄に対しては殊更に何も申し上げませんでした。それなのに法兄は、すっかりみ仏のお救いを経験なさいました。「私は人間に生きていることがこの上なくすきになりました。無条件に好きになりました。」こうした尊い言葉が法兄の口から出ました。

十八日の朝も法兄はあの南側の窓を背に坐りました。別れ間近くなった私は最後の講演をせねばなりません。ふと見れば法兄は合掌していました。そうして両眼からは熱い涙が流れて双頬を下りました。一時間、二時間、私が昼の講演をすまして来るまで法兄は動きませんでした。私はこの尊い事実の前に何を言うことも出来ませんでした。

法兄の御手紙は私に知らせました。

「先生、この世は何と美しいものでしょう。生きることの嬉しさをつくづく感じさせていただきます。ほんとに有難うございました。私はもう何も言うことも書くこともありません。思えば長い苦しみでありました。しかしどんな苦しい生活でも、思い出となれば懐しいものです。私はあの長い追憶を振り返って見れば、吾とわが心を抱いて優しい涙をそそいでやりたくありません。ああ苦しみの真ただ中、み光はやはり私を照らして下さったのです。……仏様は不可解、不可説、不可思議でございます。信じてはいられません。私が生きていますのですもの。」

あなたは尊いみ仏の子となりました。そうして法兄は悩ましい胸を抱いて、あの町裏の田国道を北に向って、二月の寒空に考えながら歩んだことを書いて更に言いました。

「そうだ、善も悪も相對のものだ。一の善が造られれば、その裏にはすぐ一つの悪が生れているだろう。十の善があれば十の悪がある。それならばああそれならば善は！ 善はついに悪を征服し得ないのだ！ 善悪の彼岸は、これまでの私は、善を昂揚することによつて、悪を絶滅することによつて、達し得ると思っていました。けれども今ははつきりと知りました。善を通して善悪の彼岸に入る事は出来ない。悪を通して善悪の彼岸に入ることには出来ない。善悪の戦いの行手には永遠の戦いがあるばかりだ。決して戦の末に救いは待っていない。この結論は一瞬私を混惑させました。けれどもその次に来たものは何。それは私を救う光だったのです。そうだ、善悪の行く手には救いはない。善悪の彼岸とは、それは善悪を創造する戦のままが、そのままそれでなければならぬ！」

今から思えばあの夜こそ、私の新生の第一夜でした。それ以来、私はじつと考えつづけて来ました。そして、ああそして最後の日は来たのです。始めて先生の前に坐った時、私はこれまで自分が色々な人に訴えては失望させられた、数々の苦い経験を思い出していました。けれども一時間もたたぬ間に私はもうすっかり「自分は救われる」と思い込んでしまいました。二日間、その間に先生は私の胸の、言葉に言われぬ深い言葉を語って下さいました。

私は不思議な思いで、先生の御言葉をむさぼる様に受け入れました。そしてあの最後の涙が私を泣かした時、私はもうすっかり何もかも言うことを無くしていました。

善悪の戦のまま、そのままが善悪の彼岸でした。善も悪も等しく悪なのでした。そうしてそれはそのまま救われているのでした。先生、私は今、勇ましい喜びにひたり切っています。悲しみも苦しみも、そんなものの凡ての中に私は救われているのでした。」

私はこうした尊い告白を、とても一人で読まして頂く気にはなれません。私はみ光の大きなお慈悲が、法兄の生命として法兄の内に生れ出たことを、涙しつづよろこんでいます。御老人の方々も何人もお目覚めのようにでしたが、若い方に一人でも信心の世界に誕生なされた方があると、限りなく心強く感じます。

ㄥ 法兄様

世間は荒んでいます。虚仮不実であります。けれども、荒んだ世間で私の魂をすまさせてはなりません。私の冷たい心根で世間を不完全にしてはなりません。寒い雪の国に行っても、私の胸は温かです。心臓の音がたえないかぎり、私の魂がどんな世界に行っても、微かながらでも、温みを持たせて下さるのは、み仏様が温い信の世界を与えて下さったからであります。み仏様の子たちが集るところは、それぞれに心の内から、み仏様から頂いた温い世界を持ち寄ります。従って、世間には見られない極楽の投影のような、愛のみなざる空気を作ります。そうした議論ぬきのよろこべる世界こそ、念仏の子に与えられた恵みであります。

ㄥ 法見様

美しいけれども寂しい、人家の少い高原のような畑つづきの山里は、紅に輝く夕陽を受けて金色に黄昏て来ました。一人の青年はたつた一人で畑の中に鍬を動かしていました。あまりに淋しい光景であります。彼の青年の頭には何が考えられていたでしょうか。富か名か女か、いいえ、その口からは尊い称名が浮んでいました。彼の青年は静かにみ仏のお慈悲を含んでいました。ふと彼の青年の眼は紅に染つた西の山端にそそがれました。太陽は一日の務をおえて悠悠として今、地平線下にその姿を投ずる時でありました。青年は鍬をとり落しました。そうして思わず合掌致しました。魂の故郷、み親のいます国、青年の魂は肉体をぬけ出でて安養浄土に通つていたのでした。その姿を念ずる私たちに、どうしてかれこれ言う言葉が出ましようぞ。

間もなく、太田河畔の発電工場の工場からは夕べの汽笛をあげました。合掌していた青年は、その汽笛が耳に入った瞬間、それがそのまま、如来大悲の「汝一心正念にして直ちに來れ、我よく爾を護る！」の招喚のみ声と聞えました。

彼の青年は合掌したまま涙ぐみました。間もなく彼の青年は、家内一人居ない我が家に帰つて来ました。そうして、その足で寺院にかけて、燈明の捧げられた本尊の前に願うきました。彼の青年とは小河内支部のㄥ法兄のことです。何も言いたくありません。こうした生きた事実をちつとも損なうことなく、一切の法兄法姉のみ胸に贈りたいと存じます。

法兄よ

生きる行手には色々な苦悩が待っていることでしょう。忍受致しましょう。切られ、罵られ、おびやかされ、裏切られ、あらゆる人間苦が私の内から生れて来ます。けれどもそれらは皆自分の悪業であります。悪業から生れる受けねばならぬ苦悩、それを如実に味わって行く時、み仏は私どもに力づけ、涙をそいで下さいます。信仰は人生の方向転換であります。楽を追うて苦にさいなまれた生活から、苦に突入して、永遠の微笑のままに、苦を突破する力の生活に生れかわることあります。畑でいい、田でいい、店でもいい、工場でもいい、事務室でもいい、何処でもいい。静かに名前を念じながら、光の未来へと生かされて行きます。至るところに懐しい法兄法師たちが待っていて下さいます。涙から涙に、山の奥の谷間にも、そこには念仏のおばあさんが待っていて下さいます。生きていることが嬉しくてなりませぬ。よし苦悩にさいなまれて生きている日も。